

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 陸 晚霞

本論文は「遁世文学の研究——中世知識人の三教融合思想と表現世界」と題し、日本中世の遁世者自身が文学に表現した遁世観と遁世者像を考察したものである。序論と結論を挟んで四編から成っていて、考察の対象の中心となっているのはジャンルの枠を越えた、鴨長明入道の随筆『方丈記』、仏教説話集『発心集』、無住道暁の仏教説話集『沙石集』、兼好法師の随筆『徒然草』で、長明の歌論書『無名抄』や無住の仏教書『雑談集』を参照するのはもちろん、仏教説話集の慶政『閑居友』や西行仮托の『撰集抄』などをも援用する。

陸氏によれば、中世の遁世者によって担われてきた仏道が根底に横たわる文学を、旧来の「隠者文学」という用語で説明するのでは、中国の隠逸と比較するうえでも、日本の平安貴族における隠遁志向からの変遷をとらえるうえでも不適當であるという。これに対して、すでに歴史学でいわれている「遁世」は出家入道、官僧からの再出家を意味するので、たとえば鎌倉新仏教の祖師たちのことは遁世僧とし、中世の仏教的な文学の担い手を遁世者と呼び分けることで、広くかつ確かで有意義な視点に立つことができるというのである。

以下、順を追って内容を要約していくが、審査において高い評価を得たところに重点をおいてまとめてみる。第一編「『方丈記』と鴨長明の世界」では『方丈記』の先蹤作品を再考して、兼明親王「遠久良養生法」や白氏新樂府「杏為梁」の影響を発掘し、「記」の文体といいながら「居の文学」のテーマゆえ「賦」の修辞技巧を取り入れることが可能になったと説明する。

第二編「『沙石集』にみる無住道暁の思想」では、当代の遁世者を厳しく批判して清貧な閑居を説き、和光同塵すなわち本地垂迹思想・和歌陀羅尼観・三聖派遣説を指摘して、儒教道教仏教三教融合思想に裏付けられていると指摘する。また、テキストの付注の誤りや出典未詳箇所につき、『宗鏡録』や『景德伝灯録』などから数多くの適切な本文の引用を指摘しているのも、データ・ベースが整備されつつある現況があるとはいえ大きな功績である。

第三編「『徒然草』における遁世論」においては、「捨つ」「食る」の一对と「閑（しづか）」をキー・ワードとして取り出して、仏教でいわれる名利の否定につき、老荘思想にも由来するところがあると根拠を示して主張する。また、すでに『沙石集』にも現れているところであったが、鎌倉時代になってから本格化した中国宋の禅仏教の影響を見て、『徒然草』第四十一段の賀茂の競べ馬の話、第二百四十三段「仏はいかなる物にか候ふらん」について具体的に指摘した。

第四編「中世仏教説話における遁世」では遁世を再定義し、理想像として時代をはるかにさかのぼる玄賓と増賀（僧賀とも）が挙げられることを確認したうえで、遁世者の望みとして閑居があり、名利を振り払うための隠徳と佯狂の振る舞いをし、臨終正念により極

楽に往生するためには心を澄ます澄心が欠かせない、という修行の一端が抽出される。このような修行生活を背後で支えているのが、教理としては天台の『摩訶止観』の二十五方便の第一具五縁（五縁を具えよ）であり、行動として具体的に描き出しているものとして『梁高僧伝』『唐高僧伝』などの高僧伝の類があったという。近世にまで時代が降ると遁世はどのように見られることになるのか、日蓮宗の深草元政の『扶桑隱逸伝』にさぐると、儒者の手になる他の隱逸伝とは異なって中世的な遁世者像をかなり受け継ぎつつも、再び東晋の陶淵明や宋の林和靖など中国の隱者への思慕のさまもうかがえるようになると、その変容を明らかにする。

陸氏はおもに老荘思想と禅仏教の浸透という観点から多くの典拠を新たに指摘して、三教融合思想の様態について考察してきたが、審査委員からは、その作業に性急なあまり儒教的な側面が手薄なのではないか、融合ということと思想という用語の点で論述がやや不徹底ではないか、また遁世文学の内包と外延はこの範囲にとどまるのか、もっと広げても有効なのか、澄心は仏道修行のどの段階にあたりどういう重みをもつのか、鋭い質問が出された。なお深く考察すべきところがないわけではないが、逆にこれらの指摘から浮かびあがるのは、本論文が個別研究にとどまらず、宗教や日中の比較文学比較文化の問題に踏みこんでいることをよく示している。その意味では、発展性のある適切なテーマに取り組んで、きわめて博覧で資料操作も手際よく優れていると、全員の意見が一致した。なお、日本語の文章として明解で読みやすく、誤字も皆無に等しいと感想を述べた委員が複数いたことも申し添える。

以上により、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。